参考

・「今昔物語集」（『日本古典文学大系 26　今昔物語集五』）岩波書店　昭三十八

巻第三十一　大刀帯ノ陣ニ売魚嫗ノ語第卅一

今ハ昔、三条ノ院ノ天皇ノ春宮ニテ御マシケル時ニ、大刀帯ノ陣ニ常ニ来テ魚売ル女有ケリ。大刀帯共此レヲ買セテ食フニ、味ヒノ美カリケレバ、此レヲ役ト持成シテ菜ノ料ニ好ミケリ。干タル魚ノ切々ナルニテナム有ケル。

而ル間、八月許ニ大刀帯共小鷹狩ニ北野ニ出テ遊ビケルニ、此ノ魚売ノ女出来タリ。大刀帯共女ノ顔ヲ見知タレバ、「此奴ハ野ニハ何態為ルニカ有ラム」ト思テ、馳寄ヨリテ見レバ、女大キヤカナル籠ヲ持タリ、亦楚一筋ヲ捧テ持タリ。此ノ女、大刀帯共ヲ見テ、恠ク逃目ヲ仕ヒテ只騒ギニ騒グ。大刀帯ノ従ノ者共寄テ、「女ノ持タル籠ニハ何ノ入タルゾ」ト見ムト為ルニ、女惜ムデ不ミ見セヌヲ、恠ガリテ引奪テ見レバ、蛇ヲ四寸許ニ切ツ、入タリ。奇異ク思テ、「此ハ何ノ料ゾ」ト問ヘドモ、女更ニ答フル事无クテ□テ立テリ。早ウ、此奴ノシケル様ハ、楚ヲ以テ藪ヲ驚カシツヽ、這出ル蛇ヲ打殺シテ切ツヽ、家ニ持行テ、塩ヲ付テ干テ売ケル也ケリ。大刀帯共其レヲ不知ズシテ、買セテ役ト食ケル也ケリ。

此レヲ思フニ、蛇ハ食ツル人悪ト云フニ、何ド蛇ノ不毒ヌ。

然レバ、其ノ躰憖ニ无クテ切々ナラム魚売ラムヲバ広量ニ買テ食ハム事ハ可止シトナム、此レヲ聞ク人云繚ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。

・「今昔物語に就いて」より抜粋（『芥川龍之介全集 7』）　芥川龍之介　筑摩書房　平五

「今昔物語」三十一巻は天竺(1)、震旦(2)、本朝(3)の三部に分れている。本朝の部の最も面白いことは、おそらくは誰も異存はあるまい。そのまた本朝の部にしても最も僕などに興味のあるのは「世俗」並びに「悪行」の部である。――すなわち「今昔物語」中の三面記事に近い部である。しかし、――

しかし僕は仏法の部にも多少の興味を感じている。それは仏法そのものは勿論、天台や真言の護摩(4)の煙に興味を感じていると云うことではない。唯当時の人々の心に興味を感じていると云うことである。道命阿闍梨(5)は阿闍梨とは言うものの、和泉式部の情人だった。しかし彼の経を誦する時には諸天善神も歓喜の余り、法輪寺(6)の前へ下って来た。（本朝の部巻二、天王寺別当道命阿闍梨語第卅六）のみならず金峯山(7)の蔵王(8)、熊野(9)の権現(10)、住吉の大明神(11)等の下って来たのは必しも経そのものの功徳に浴したかったためばかりではない。「就レ中にその音微妙にして聞く人皆首を低て不レ貴と云ふ事」のなかったためである。当時の諸天善神も勿論護法に熱心だったであろう。が、彼等の情熱の中にはやはり僕等の音楽に対する情熱もまじっていない訣ではなかった。

更にまた仏法の部の僕に教えるのはいかに当時の人々の天竺から渡って来た超自然的存在、――仏菩薩を始め天狗などの超自然的存在を如実に感じていたかと云うことである。僕等は畢に彼等ではない。法華寺の十一面観音も、扶桑寺の高僧たちも、乃至は金剛峯寺の不動明王（赤不動）も僕等には唯芸術的、――美的感激を与えるだけである。が、彼等は目のあたりに、――あるいは少くとも幻の中にこう云う超自然的存在を目撃し、そのまた超自然的存在に恐怖や尊敬を感じていた。たとえば金剛峯寺の不動明王はどこか精神病者の夢に似た、気味の悪い荘厳を具えている。あの気味の悪い荘厳は果して想像だけから生まれるであろうか？

「今は昔、河内の国若江の郡の遊宜の村の中に、一人の沙弥[15]の尼有けり。……仏の像を写す。……而る間尼聊に身を営む事有るに依て、暫く寺に不レ詣ざる程に、其の絵像盗人の為に被レ盗ぬ。尼此れを悲び歎て、堪ふるに随て、東西を求むと云へども尋得る事無し。……亦知識[17]を引て放生を行ぜむと思ふ。摂津の国の難波の辺に行ぬ。河の辺を徘徊する間、市より返る人多かり。見れば荷へる箱を樹の上に置けり。主は不レ見えず尼聞けば此箱の中に種々の生類の音有り。此れ畜生の類を入れたる也けりと思て、必ず此れを買て放たむと思ふ。……良久く有て箱の主来れり。尼此れに会て曰く、『此の箱の中に種々の生類の音有り。我れ放生の為に来れり。此れを買はむと思ふ故に汝を待也』と。箱の主答て曰く、『此れ更に生類を入たるに非ず』と。……其の時に市人等来り集りて此の事を聞て曰く、『速に其箱を開て其の虚実を可レ見し』と。箱の主白地[19]に立去る様にて箱を棄て失ぬ。……早く逃げぬる也けりと知て、其後箱を開て見れば、中に被レ盗にし絵仏の像在ます。……」（同上。尼所被盗持仏自然奉値語第十七）

この話も樹の上の箱の中に畜生の音の聞えると云うことに美しい生まなましさを漲らせている。金剛峯寺の不動明王を描いたのもあるいは職業的画工ではなかったかも知れない。しかしこの話を作ったものは（もし「作った」と言われるとすれば）小説家でも何でもない当時の民の一人である。彼等は必ず仏菩薩の地上を歩いているのを見たことであろう。それからまた鳶に似た天狗の空中を飛んでいるのを見たことであろう。

僕は前の話を批評するのに「美しい生まなましさ」と云う言葉を使った。美しいか美しくないかはしばらく問わず、この「生まなましさ」は「今昔物語」の芸術的生命であると言っても差し支えない。たとえば、「三獣行菩薩道兎焼身語第十三」（天竺の部。巻五）を見ても、「今昔物語」の作者は兎のためにこう云う形容を加えている。――

「兎は励の心を発して……耳は高く瘟せ[20]にして目は大きに前の足短かく尻の穴は大きに開いて東西南北求め行けども更に求め得たる物无し。」

「耳は高く」以下の言葉は同じ話を載せた「大唐西域記[21]」や「法苑珠林[22]」には発見出来ない。（この話は誰でも知っている通り、釈迦仏の生まれない過去世[23]の話、―Jātaka 中の話である。）従ってこう云う生まなましさは一に作者の写生的手腕に負うていると思わなければならぬ。遠い昔の天竺の兎はこの生まなま

しさのあるためにいかにありありと感ぜられるであろう。

　この生まなましさは、本朝の部には一層野蛮に輝いている。一層野蛮に？――僕はやっと「今昔物語」の本来の面目を発見した。「今昔物語」の芸術的生命は生まなましさだけには終っていない。それは紅毛人(24)の言葉を借りれば、brutality（野性）の美しさである。あるいは優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。

注

（1）インド。巻一―五。　（2）中国。巻六―十。　（3）日本。巻十一―三十一。　（4）密教の秘法。薪を燃し、一切の悪業を焼滅する法。　（5）藤原道綱の長子。和歌をよくし「道命阿闍梨集」がある。「阿闍梨」は僧の職名。天台・真言二宗の高僧が任ぜられる。　（6）京都市右京区にあり。真言宗。　（7）四天王寺。大阪市天王寺区にあり、聖徳太子の建立。　（8）社寺の長官。　（9）金峯山寺。奈良県吉野郡金峯山上。開祖は役小角と言われ、金剛蔵王を信仰する修験道の本山。　（10）熊野三所権現。熊野三山の主祭神をいう。和歌山県東牟婁郡。　（11）住吉神社。大阪市住吉区。中古には和歌の神として信仰された。　（12）奈良市にある法華滅罪の寺。国分尼寺の本山。十一面観音は国宝。　（13）未詳。　（14）高野山上にある真言宗総本山。弘法大師の開基。「不動明王」は国宝。智証大師作と伝える。　（15）初心の僧。また、尼。　（16）私事。　（17）名僧。　（18）捕えられた生物を放ち後世を祈る事。　（19）ちょっと。　（20）せむし。　（21）唐の玄奘三蔵撰。三蔵法師のインド西域地方旅行記。　（22）唐の西明寺の道世撰。経論の説話を集成したもの。全百巻。　（23）ジャータカ（サンスクリット語）。本生譚。最古のインド民話集。釈迦が前世に経験した因縁事を現世の出来事と比べて説いたもの。　（24）西洋人。